

The “Genius” における「都市」と 「牧歌」の描かれ方

土屋 陽子

1. はじめに

Theodore Dreiser (1871-1945) の *The “Genius”* (1915) は、主人公 Eugene Witla のこじれた結婚生活、芸術と商業との間での葛藤、広告担当の重役や出版社取締役の仕事とそこでの人間関係のもつれ、といった点がドライサー自身の人生と重なることから、ドライサー作品の中で最も自伝的な小説であると解釈されている。¹ ユージーンが作家ではなく画家として設定されているという大きな相違はあるものの、事あるごとに本作品の中に見られる様々な要素がドライサーの身の上で起こった出来事と照らし合わされ、ユージーンをドライサーの分身として捉える読みが一般的になされてきた。² そして、分身であるユージーンに伝統的な芸術と商業的な営みの間で悩む芸術家像を投影することで、本作品はドライサーの世紀転換期におけるアメリカ文化に対する文化批評的な作品であると認識されることが多い。

Miles Orvell は、19 世紀から 20 世紀にかけてのアメリカの芸術は、大まかに言えば、ハイ・カルチャーとポピュラー・カルチャー、精神的価値と物質的野望、芸術的世界と商業的世界、の 2 局面に分けられていたと言いつつ、そのどちらにも深く関心を持ち、作品の中に投影している数少ない作家の一人としてドライサーを挙げている(127)。そして特に前作、*Trilogy of Desire* と『天才と呼ばれた男』には芸術 (Art) と商業 (Business) の 2 局面が同時に描かれていると指摘し、それら 2 つの世界を共に体現する人物として、各主人公、実業家で美術品コレクターの Frank Cowperwood と、天才芸術家でありながら有名出版社の編集長を務めるユージーンを捉えている。そして特に芸術家の立場から資本主義社会での生き残りを描いた『天才と呼ばれた男』には、芸術と商業のつながりに対するドライサーの集中した態度が見られ、世紀転換期におけるアメリカ社会の中で、芸術的世界と商業的世界の間に置かれながらその 2 つの繋がりの中に発展を見出していかに得なくなったアメリカの文化に対するドライサーの批評が示されている、と指摘する (127)。

一方、ドライサーの自然主義を分析する Charles Child Walcutt は、彼の自然主義を4段階に分け、『欲望3部作』の第1、2部、*The Financier* (1912)、*The Titan* (1914) と共に『天才と呼ばれた男』をその第2段階に分類している。そして、社会的強者の立場から都市を描いたこれらの作品は「アメリカの自然主義小説のどの作品にも見られないほど多量に出来事の記録を示した作品である。」と述べ、当時の都市社会のありのままを描いた、ドライサーの自然主義を代表する作品であると指摘する。また、成功者を主人公とするこの時期のドライサー作品には、主人公の、アメリカ社会にある因習的価値観への反抗も強く見られると指摘し、ドライサーの反因習的見解が示されていると述べている(199-206)。

このように、本作品は主として、自伝的小説、変化するアメリカ芸術に対する文化批評的作品、或いは作者の反因習的見解を示した作品として捉えられてきたのである。

しかし、作品の社会的背景を考慮すると、オーヴェルが指摘する、作品中に示されたアメリカ芸術の葛藤が、単に作者の文化批評、或いは反因習的見解を示しているのみではないことが分かる。『天才と呼ばれた男』の舞台は、『欲望三部作』と同様、世紀転換期のアメリカ都市社会である。世紀転換期といえば、産業化が進みアメリカ社会の都市化が顕著になる時代である。⁴ James L. Machor が述べるように、従来この時期のアメリカ文学には反道徳性から引き起こされる反都市 (Anti-Urban) の傾向が強く見られる (329)。しかし、『欲望三部作』、『天才と呼ばれた男』の主人公達に示されるように、当時の人々は、都市化のもたらす非道徳性に気付きつつも、その華やかさに惹きつけられており、その一方で、都市と対照的な空間である田舎が示す牧歌的理想にも憧れを抱いていたのである。Raymond Williams の著書 *The Country and the City* の第一章では、「都市」は金銭、贅沢、文明など先進的な生活に関わるイメージを持つものとして、「田舎」は、簡素、無垢、因習など牧歌的な (the pastoral) イメージを持つものとして定義されている(1)。ウィリアムズが指摘するように、世紀転換期におけるアメリカの都市社会にはその二つのイメージが「都市」(the urban) と「牧歌」(the pastoral) という形で存在しており、人々を翻弄していたのである (297)。⁵

これらを考慮すると、『天才と呼ばれた男』にみられるアメリカ芸術の描写も、この、「都市」と「牧歌」の二項対立と関連して示されていると考えられる。即ち、ドライサーは『天才と呼ばれた男』においても、世紀転換期のアメリカの都市社会における「都市」と「牧歌」の二項対立を、「商業」的価値と「芸術」的価値の間における主人公の葛藤に示したのである。

さらに、この「都市」と「牧歌」の不安定な関係は、『天才と呼ばれた男』において、もう一つの葛藤を介しても示されている。それは、主人公の女性関係を巡る葛藤である。ウォルカットが『天才と呼ばれた男』は『欲望三部作』と類似しており、どちらも同じテーマに基づいて描かれていると考えられるため、詳細な分析は此处では必要ないであろう(205)。と述べる程、本作品は『欲望三部作』と非常によく似た設定で描かれている。どちらの作品も裕福な身分の若者がそれぞれの才能をいかし、都市社会を如何に生き抜いていくかを描いている。クーパーウッドは、鉄道事業により資本家として都市社会で成功し、手に入れた財を使って美術品を収集する。一方ユージーンは、都市を描く画家として才を認められるが、結局豊かな生活のために出版業界に進出し資本家として成功する。両者とも、財を手に入れる為には都市社会での事業への加担が必須であるという設定となっているが、それと同時に、両作品とも共通して、主人公の資本家としての都市での成功の過程を、彼らの激しい女性関係と関連付けて示している。『欲望三部作』にみられるクーパーウッドと彼を巡る女性との関係の描写の変化には、「都市」と「牧歌」の不安定な関係と、そこに示されるドライサラーの「都市」と「牧歌」の共存に対する懐疑的な見解を読み取ることが出来るが、⁶ 『天才と呼ばれた男』が『欲望三部作』に類似した設定で描かれていることを考えると、ユージーン的女性遍歴からも同様に「都市」と「牧歌」の関係を読み取ることが出来る。実際、ユージーン妻として登場する **Angela Blue** は、都市とは対照的な空間として提示される **Blackwood** という田舎町で生まれ育った、ピューリタンの傾向が強く、因習的価値を重んじる娘として描かれており、牧歌的理想を体現するものとして捉えることが出来る。一方、ユージーン愛人として登場する女性達は皆、都市社会に何らかの関わりをもって描かれている。ユージーン激しい女性関係は、ユージーンとアンジェラ、そしてその他の女性という三角関係の中で展開されており、その中のユージーン葛藤を考慮すると、『天才と呼ばれた男』においても、主人公の女性関係の中に「都市」と「牧歌」の二項対立の関係を読み取ることが可能であろう。

つまり、本作品には、主人公の、「商業」と「芸術」との間における葛藤と、女性問題を巡る「都市」的価値と「牧歌」的価値との間における葛藤の2つが相互に関連しながら描かれており、「都市(浮気相手)／商業」対「牧歌(アンジェラ)／芸術」という形で、当時のアメリカ社会に見られる「都市」と「牧歌」の関係が示されているのである。

本論では、『天才と呼ばれた男』に対してこれまでなされてきた、自伝的小説、

または文化批評的作品としての分析、或いは、ドライサーの反因習的見解を示した作品としての解釈からは離れ、世紀転換期における「都市」と「牧歌」の不安定な関係が、本作品においても、主人公と女性との関係、或いは芸術との関係の中にアレゴリカルに描かれていることを示したい。その上で、本作品が単にドライサーの反因習的見解を示した作品ではなく、世紀転換期のアメリカ社会に見られた「都市」と「牧歌」の不安定な関係と、「都市」と「牧歌」の共存に対するドライサーの中立的で曖昧な見解を示した作品であることを明らかにする。

2. ユージーン的女性関係から読み取る「牧歌」と「都市」の関係——「牧歌」の影響力

①「牧歌」的理想像を示すアンジェラ

本作品の中でユージーンは非常に多くの女性と交際を持つが、終始一貫して登場する女性は妻となるアンジェラのみである。アンジェラは、ブラックウッドという小さな田舎町に育ち、牧歌的イメージを体現した女性として描写されているが、作品におけるユージーンの激しい女性関係は常に彼とアンジェラとの関係を軸に展開されていく。牧歌的なアンジェラと、彼女とは対照的な都市的価値観を示す存在として描かれるその他の女性達の間で苦しむユージーンの描写をみると、彼の女性関係に「牧歌」と「都市」の不安定な関係が示されていることが分かる。

アンジェラは、ユージーンよりも年上の小学校教師で、小さな田舎町で育った娘である。ユージーンのアングェラに対する第一印象は次のようなものである。

He thought her young; and was charmed by what he considered her innocence and unsophistication. ... In the conventional sense she was a thoroughly good girl, loyal, financially hottest, truthful in all commonplace things, and thoroughly virtuous, moreover, in that she considered marriage and children the fate and duty of all woman. Her own emotions, though perhaps stronger than his, were differently aroused. The stars, the night, a lovely scene, any exquisite attribute of nature should fascinate him to the point of melancholy. (43)

アンジェラが、従来の理想的な女性像に忠実な、因習的な女性として描かれており、ユージーンはそのようなアンジェラに対し、高貴な自然の美しさを感じ

る。また、アンジェラが、ユージーンに会いにシカゴへ行った際、彼に対し “I’m just a country girl and I don’t get to the city often.” (44) という描写からも、アンジェラが都市 (the city) とは対照的なイメージを持つ田舎娘 (a country girl) として描かれていることが分かる。アンジェラが田舎のもつ自然の美しさを体現する女性として示されていることは、ニューヨークで画家として生活する目途がついたユージーンが、彼女に会うためにブラックウッドを訪れる場面にも顕著である。以下は、ユージーンがブラックウッドに到着した直後、馬車の上から目にするブラックウッドの景色である。

There were so many lovely wild flowers growing in the angles of the rail fences - wild yellow and pink roses, elder flower, Queen Anne’s lace, dozens of beautiful blooms, that Eugene was lost in admiration. His heart sang over the beauty of yellowing wheat fields, the young corn, already three feet high, the vistas of hay and clover, with patches of woods enclosing them, and over all, house martens and swallows scudding after insects and high up in the air his boyhood dream of beauty, a soaring buzzard. (77)

そして、このような自然の情景は「都市に住む者には分からない」 (“We city dwellers do not know”) と感じている。田舎で生まれたユージーンが、都市に住むようになったことで「都市の住人」として田舎の自然の美しさに感銘している様子がここには描かれており、ユージーン自身の都市化がみられる。また、自然に囲まれたアンジェラの家に滞在中、ユージーンはハンモックに揺られながら、農業を営むアンジェラの家族の生活を “so pastoral, so sweet” と感じ、これよりも平和な生活は無いような気にさえなっている (83)。このようなユージーン感情は、都市に住む人々が抱く牧歌的理想への憧れを象徴しており、アンジェラがそのような「牧歌」的理想を象徴する女性として描かれていることが分かる。

また、アンジェラ自身の考え方をみても、彼女が因習的価値観を重んじる女性として描かれていることは明らかである。以下は彼女の結婚に対する見解である。

Angela’s mental and emotional composition was stable. She had learned to believe from childhood that marriage was a fixed thing. She believed in one life and one love. When you found that, every other relationship which did not minister to it was ended. If children came, very good; if not,

very good; marriage was permanent anyhow. And if you did not marry happily it was nevertheless your duty to endure and suffer for whatever good might remain. You might suffer badly in such a union, but it was dangerous and disgraceful to break it. If you could not stand it anymore, your life was a failure. (54)

この考え方は、作品中でアンジェラが生涯貫く信条となっているが、これは、後に登場する、都市社会を象徴した新しい女性として描かれるユージーンの愛人たちとは全く異なる考え方であり、田舎で育ったアンジェラの因習性を強調している。

ユージーンを介してシカゴという都市の生活を知ったアンジェラは、今まで自分がいた小さな世界を *shabby*(53) と感じるようになるが、都市に生きるユージーンと、田舎を体現するアンジェラの関係について、ドライサーは作中で次のように述べている。

Perhaps they complemented each other at this time as a satellite complements a larger luminary - for Eugene's egoism required praise, sympathy, feminine coddling; and Angela caught fire from the warmth and geniality of his temperament. (44)

実用的なユージーンと感情的なアンジェラが、この時点では、互いに補完関係にあることがここには示されている。つまり、都市的価値と牧歌的価値の社会における共存の可能性 (*urban-pastoral harmony*)⁷ に対する作者の期待がこの時点では示されているのである。

アンジェラが、都市的見解とは対照的な牧歌的理想を持つ女性として描かれていることは、婚約期間中にユージーンが交際する他の女性達の描写と比較しても明らかである。例えば、シカゴで画塾に通い始めたユージーンは、そこでヌードモデルをする *Ruby Kenny* と出会い、その美しさと大胆さに惹かれる。ある日、教室で二人だけとなり、初めて言葉を交わす。

"Where do you live? I'll want to know that." He [Eugene] searched for a pencil. She [Ruby] gave him her number on West Fifty-Seventh Street. ... It was a street of shabby frame houses far out on the South Side. He remembered great mazes of trade near it, and unpaved streets and open stretches of wet prairie land. (49)

ルビーの生まれ育った場所が、アンジェラが育ったような自然豊かな場所とは異なり、シカゴの、まさに今、自然が都市化していく過程にある一画であることが示されている。つまりルビーは都市化を体現する存在であり、そのような彼女にユージーンは惹かれ、彼女の家で生まれて初めて女性と関係を持つのである。そのような体験はユージーンがアンジェラに求めても手に入れることが出来なかった喜びであり、彼はアンジェラとの結婚を考える一方、可能であればルビーとの関係も続けていきたいと考えるようになる。田舎の自然の美を示すアンジェラと、都市化していく空間を示すルビーの間で揺れ、そのどちらも手に入れたいというユージーンの願望がみられる。しかし、結局ルビーではなく、「ルビーに比べ純粋である」([Angela] was purer than Ruby) アンジェラの牧歌的側面により強く惹かれ、彼女を選ぶのである。

その後、ニューヨークへと移り、画家として生計を立てることに成功したユージーンは、アンジェラに会うためにブラックウッドを訪れ、そこでの牧歌的な生活に強く感銘を受けるのだが、ニューヨークへ戻り程なくして、二人の女性芸術家、彫刻家である Miriam Finch と、オペラ歌手であり国際的プリマドンナである Christina Channing に出会い、ますます都市生活に馴染んでいく。彼女達はユージーンに都市社会を見せる存在として描かれ、知的で芸術的で、尚且つ独立した、新しいタイプの女性として描かれている。特に、若くて美しいクリスティーナにユージーンは心を奪われ、恋に落ちる。そしてその夏、アンジェラに会いに行くのを中止し、クリスティーナの招待で彼女の別荘のある Florizel を訪れることにする。滞在中クリスティーナとユージーンは Blue Ridge Mountains へ二人で旅行に出かける。自然の中でユージーンはクリスティーナの美しさを自然の美しさ重ね、その美の永遠の所有を夢みるのであるが、所有されることを望むアンジェラとは異なり、クリスティーナはそこでの最後の日にユージーンに対し以下のように宣言する。

“Now, when you see me again I will be Miss Channing of New York. You will be Mr. Witla. We will almost forget that we were ever here together. We will scarcely believe that we have seen what we have seen and done what we have done.”

“But, Christina, you talk as though everything were over. It isn't, is it?”

“We can't do anything like this in New York,” she sighed. “I haven't time and you must work.”

There was a shade of finality in her tone.

“Oh, Christina, don't talk so. I can't think that way. Please don't.”

“I won’t,” she said. (108)

自然の中で繰り広げられた二人の幸せな関係は、都市社会で生きていくには適さないということをクリスティーナはここでユージーンに示している。ここで見せるクリスティーナの強い態度は、都市で成功する新しい女性を意味しており、ブルーリッジ山脈の別荘で彼女が見せていた女性像とは相反するものである。自然の中にいるときには“had given him of herself fully”と理想的女性像を示していた彼女が、都市社会の中では“to be free to work”を主張する新しい女性像を示すのである(108)。即ち、クリスティーナという一人の女性の中に、都市と牧歌の概念が両方示されているのである。そしてそのような彼女との関係を続けたいというユージーンの想いは、そのどちらも手に入れたいたいという彼の願望を示し、当時の人々の都市と牧歌の共存への理想を表していると捉えることが出来る。更に、その願望が否定されるここでの描写には、「都市」と「牧歌」が人々の好都合に調和して存在することに対するドライサーの否定的見解が示されていると考えられる。

ニューヨークへ戻った後、クリスティーナは宣言通り二人の間には何事もなかったかのようにふるまう。クリスティーナの態度にショックを受けたユージーンは、結局 “[Angela] was a girl who would not treat him so. She really loved him. She was faithful and true.” (113) と、アンジェラの保守性に安らぎを感じ、彼女の元へと戻るのである。都市に対する牧歌的理想の強さをここにも見ることが出来るのであるが、一方でユージーンは、アンジェラが都市社会に適応できるのか疑問に感じるようになり、結婚することが正しい選択なのか分からなくなってもいる(122)。⁸そして、“[I]t was hardly possible for Angela and Eugene not to renew the old relationship on the old basis.” (118) とあるように、都市社会に馴染んだユージーンと未だ田舎町ブラックウッドで生活するアンジェラが昔のように調和した関係を持つことが困難になっているということもここには示されている。ドライサーが牧歌的理想の根強さを認めつつも都市的価値と牧歌的理想の共存の難しさも示そうとしていることが、アンジェラとユージーン、そしてアンジェラと結婚するまでの彼の女性関係から読み取ることができる。

②スザンヌに示される反因習性

結婚後、ユージーンは画家として認められ始めたのも束の間、アンジェラとの激しい性生活が原因で制作に打ち込めずスランプに陥る。更らに過去の女性

関係が露見し、アンジェラの激しい嫉妬を受けた挙句健康を損ねてしまう。結局画家を辞め肉体労働に従事することになるのであるが、その後運よく出版業界に職を見つけ、アートディレクターや編集者として才覚を表し資本家へと成り上がっていく。そして、ユージーン最後の愛人となる、18歳のスザンヌに出会い、彼女に熱中する。スザンヌに初めて会った時、ユージーンは“*Youth! Youth! What in this world could be finer - more acceptable! Where would you find its equal?*” (325) と感じ、彼女の若さが示す美を強く讃えている。

そして一夫一婦制に疑問を示し、スザンヌを手に入れることに夢中になる。ユージーンとスザンヌのこの許されざる関係は、Hussman が指摘するように、性的問題を巡る因習的見解に対するドライサーの反抗的な態度を示したものであると捉えられている (94-97)。スザンヌが反因習的見解を示すものであるということは、ユージーンとの関係がアンジェラに知られてしまった時の彼女の挑戦的な態度をみても分かる。激怒したアンジェラによるユージーン過去の暴露を受け、スザンヌはユージーンに対し“*I don't care about the past.*” (381) と、過去にこだわる因習的なアンジェラとは異なることを主張する。また、二人の関係を知り取り乱す母親、デイル婦人に向かい、“*You don't understand me. You never did, mama.*” “*I love Mr. Witla, ... I don't care anything at all about what people think.*” (394) と言い放ち、因習的価値には縛られないことを主張している。このような、スザンヌの見解には、確かにドライサーの反因習的態度が提示されていると考えられる。

しかし、スザンヌにより示されているのは反因習的見解のみではない。スザンヌとユージーンの関係は、デイル夫人により企てられた、ユージーン出版業界での地位失墜、それに伴う資産の喪失が原因で終わりを迎える。この時のデイル夫人の行為は無情であるようにも思われるが、Hussman が、“*Mrs. Dale's actions also save Suzanne from the rigors of living up to Eugene's expectations.*” (100) と指摘するように、女性に対するユージーンの利己的な理想からスザンヌを救い出すという役割も果たしていると考えられる。この、「ユージーンを抱く理想」というのは、彼が女性に抱く牧歌的な理想のことを指していると考えられる。それは、彼がスザンヌを失ったときに Keats の詩を思い浮かべ、都市社会を放棄してでも手に入れたいと願ったスザンヌとのロマンティックな日々の喪失を嘆いていることから (440) 窺うことが出来る。⁹つまり、反因習的見解を示すスザンヌも、ルビーやクリスティーナと同様、ユージーンに都市的価値と牧歌的理想の両方を夢みさせ、その両者の所有を望ませているのである。しかし、今回もまたその様なユージーンの願望は叶わずに終わる。

都市と牧歌の共存の難しさがスザンヌとの関係にも象徴されているのである。

スザンヌと別れるまで自己中心的な態度をとり続けてきたユージーンであるが、スザンヌと別れた後、彼の態度に変化が見られるようになる。スザンヌに立ち去られたユージーンは出産を控えるアンジェラのもとに帰り、アンジェラの命が危ういことを知る。一時は彼女の死を願ったこともあったが、苦しむアンジェラを前に自分の過去を反省し、彼女の無事な出産を願うようになる。以下は、アンジェラが娘を出産した直後の二人の会話である。

Eugene cried also. "It's a girl, isn't it?" she asked. "Yes," said Eugene, and then, after a pause, "Angela, I want to tell you something. I'm so sorry. I'm ashamed. I want you to get well. I'll do better. Really I will." ... She caressed his hand. "Don't cry," she said, "I'll be all right. I'm going to get well. We'll both do better. It's as much my fault as yours. I've been too hard." ... "I'm so sorry, I'm so sorry," he finally managed to say. (466)

この後、アンジェラは息を引き取るのだが、彼女が最後まで夫に忠実な理想的な妻であったことがここでは示されており、都市的価値に対立する牧歌的理想を象徴する女性として描かれていることがわかる。結局ユージーンは、アンジェラの存在意義を認め、彼女が遺していった子供と共に残りの生涯を過ごす決意をする。スザンヌに一度は夫を奪われたアンジェラの生涯は、牧歌的理想の敗北、或いは、都市と牧歌の共存に対する否定的見解を意味するようにも思えるが、ユージーンに与えられたこの結末には、都市に対する牧歌の影響力の強さも示されていると考えられる。

3. 芸術の描写から読む「都市」と「牧歌」の関係——「都市」化の影響力

①「都市／商業」対「牧歌／芸術」という関係

ここまで、牧歌的理想像を示すアンジェラを軸に展開されるユージーンの女性関係に、当時のアメリカ都市社会における「都市」と「牧歌」の不安定な関係と、牧歌の影響力の強さが描き出されていることを示してきたが、都市と牧歌の不安定な関係は「商業」と「芸術」の間に置かれたユージーンの葛藤にも示されている。「商業」と「芸術」の間で葛藤するユージーンの姿は、まず、彼がニューヨークにやって来た当初、都市生活に馴染んで来た彼が交際費に頭を悩ませている様子に示されている。

New York presented a spectacle of material display such as he had never

known existed. ... Art as he had first dreamed of it, art had seemed not only a road to distinction but also to affluence. Now, as he studied those about him, he found that it was not so. Artists were never tremendously rich, he learned. (98)

ニューヨークという「都市」社会で、金銭的に豊かな生活を送るには、芸術は無意味であることをユージーンが認識していることが分かる。

さらに、「商業」対「芸術」の関係が「都市」対「牧歌」を示唆しているということが顕著なものとして、避暑地としての娯楽施設 Blue Sea 建設への投資についての描写が挙げられる。その投資の話がでた当時、ユージーンは年俸 2,500 ドルの事業家となっており、浪費家として知られていた。彼は、将来 25 万ドルになるという話に魅了され、その関連会社への 5 万ドルの投資を承諾する。その際アンジェラとの間になされたやり取りが以下のようなものである。

Angela finally said, "We have enough now, really to live on, if you want to return to your art." Eugene smiled, "My art. My poor old art! A lot I've done to develop my art." "I don't think it needs developing. You have it. I'm sorry sometimes I ever let you leave it. We have lived better, but your work hasn't counted for as much. What good has it done you outside the money to be a successful publisher?"

... "My dear lady," Eugene once said solemnly, "I can't live by painting pictures as I am living by directing magazines." (332)

ここでアンジェラはユージーンに、資本家としての成功よりも芸術家としての活動を願うのであるが、それに対しユージーンは、芸術では現在のような華やかな生活は出来ないと主張し、芸術よりも資本家としての道を選んでいる。芸術を優先するアンジェラの態度は、ビジネス界の人々から "She was not exactly suited to that topmost world in which he [Eugene] was now beginning to move." (313) と、資本家ユージーンの妻として不釣り合いであると思われる。芸術がアンジェラと結びつけられ、都市的価値と対立する牧歌的理想を示す存在として描かれていることが分かる。「都市」と「牧歌」の 2 項対立と並行して示される「商業」と「芸術」の関係が読み取れる。

また、本作品においてユージーンが芸術家として生計をたてることを決意する場面は 2 か所あるが、そのどちらにもアンジェラの影響があることも忘れてはならない。作品前半での画家としてのニューヨーク進出では、アンジェラとの結婚がその起点となっており、後半での画家としての再起は、残されたアン

ジェラ 2 世を養っていくことがその起点となっている。アンジェラのイメージと芸術が結びつけられて描かれており、芸術がアンジェラと同様、本作品において牧歌的理想を示すものとして扱われていることがここからも窺える。このように、事業家ユージーンと画家ユージーンの間での動揺をアンジェラの存在と関連付けて捉えると、本作品における「都市／商業」対「牧歌／芸術」という関係が明らかになるのである。そして、一度はスザンヌにユージーンを取られ絶望に陥ったアンジェラのように、商業的価値を前に都市から虐げられるものとして芸術が示されていることが分かり、「牧歌」に対し強い影響力を示す「都市」の存在を読み取ることができる。

②「牧歌／芸術」内にみられる対立

しかし本作品において、芸術は、常に「都市／商業」的価値に対立する「牧歌」的理想を示すものとして描かれているわけではない。先に挙げたオーヴィルの指摘にあるように、19 世紀末のアメリカ芸術界は、ハイ・カルチャーとポピュラー・カルチャー、精神的価値と物質的野望といった対立に直面していた。それまでのアメリカ芸術界にそのような対立が全くみられなかったわけではなく、世紀転換期において、都市化と共に新しい精神を表現する芸術家が多く出現し、彼らの活躍によりその対立は一層顕著となる。つまり、都市化に伴い、「芸術」そのものの中でも、新しい「都市」的価値と、伝統的でお上品な「牧歌」的価値の対立が問題視されるようになったのである。画家を主人公にした『天才と呼ばれた男』の中でも、その対立は芸術描写を通して窺うことができる。

本作品が単に自伝的小説ではない理由として、主人公ユージーンが画家であることが挙げられる。主人公を作家ではなく画家としたのは、ドライサーが、特にアメリカ美術において顕著であった新しい風潮としてのリアリズム芸術の台頭に着目し、それを示すことでアメリカ芸術全体に同様の傾向があることを強調したかったからであると考えられる。Cyrille Arnavon の論文で明らかにされているように、ドライサーは早い頃から美術に深い関心を持ち、実際に画家と交際していたのみならず、美術に関する記事も執筆していた(113-14)。特に、当時新聞出版界の中で重要な役割を担っていた挿絵画家たちと接触する機会が多く、ジャーナリズムにおける挿絵画家たちこそ、アメリカ美術における新しい風潮を担う勢力であったと考えていたようである(115)。彼らは、当時のアメリカ美術において主流とされていた、肖像画や自然を描くニューヨークのナショナル・アカデミー・オブ・デザインの画風に強く反発し、Ash-Can School

と呼ばれ、当時のアメリカ芸術界に新しいリアリズムの流れを作り上げた。¹⁰ 一般にユージーンは、このアッシュ・カン派をモデルとしているといわれているが、¹¹ 彼の画風が示すのは、単に芸術における新しい風潮のみではない。ユージーン作品について、アルナヴォンは以下のように述べている。

The bleeding mediation of lonely spectator wandering through a large city, a characteristically Dreiserian Theme, emerges for the first time; it evokes a feeling of utter loneliness in “atomistic” individuals as they are first confronted with metropolis like Chicago in *Sister Carrie* and *Newspaper Days*, or New York in *The “Genius.”* The description of this mood is perhaps one of Dreiser’s most original creations. (117-18)

ユージーン作品にはドライサーが当時の都市社会に発見したテーマが描かれており、それはドライサーの描く「都市」を象徴するものであると考えられる。¹² ユージーンはその様な作品を描くことでニューヨークの芸術界で認められる存在となる。つまり、ドライサーは、それまでの伝統的な芸術に反抗するアッシュ・カン派を描くことで、「都市」的価値の影響力が強くみられるようになった当時のアメリカ芸術界の状況を示そうとしたのである。

19世紀末に出現した新しい精神を持った芸術が「牧歌」的イメージに反抗する立場にあることは、ニューヨーク芸術界におけるアンジェラの扱われ方からもみることが出来る。先にも示したように、アンジェラと結婚する際、芸術家の同僚たちは皆、彼の結婚を失敗だと感じ、性的問題に関する因習的な慣習に従うユージーンを「愚か」と非難する。また、芸術界で活躍し、ユージーンにニューヨークの芸術界を教える役割を持つ女性芸術家、ミリアムはアンジェラの事を、“his[Eugene’s] wife was not very important after all, not of the artistic and superior world to which she and he belonged.” (140) と、自分達の属する社会には適さないとみなしている。この描写の直前には、ニューヨークの新居でアンジェラがユージーンのために、ホットビスケットや手作りバター、トマト入りオムレツやポテトのクリーム煮に珈琲、という理想的な朝食を用意するという描写がみられ、そのような、「牧歌」的理想、因習的な女性像を象徴するアンジェラが、社会の「都市」化と共に出現した新しい精神を持つニューヨークの芸術界には適応できないものとして作品の中で示されていることが分かる。アンジェラと共に「都市」に対立する「牧歌」として示されていたはずの「芸術」の中にも、新しい風潮が生まれてきていることが示されているのである。更に、ユージーンが作品の結末で芸術家として再起する際、再びアッシュ・カン派を思わせる画風で芸術界に戻っていく様子からは、ドライサーがそ

のような新しい精神の出現を認め、その重要性を自覚していたということが分かる。

芸術を商業的価値と対立するものとして示しつつも、その芸術の中にも新しい精神の影響が目立つようになってきたという事実を示すことで、「都市」化の影響力の強さを描くと同時に、当時のアメリカ社会の、「都市」と「牧歌」が混在する不安定な現状も描いているのである。

4. おわりに

都市社会の中で、女性の美に対する欲求と優雅な生活に対する欲求に翻弄されてきたユージーンの人生であったが、結局彼に残されたものは、アンジェラ2世と、芸術家としての職業であった。これらは作品の初めにユージーンに与えられるものの、都市での成功には適さないとして一旦は排除されるものである。そのような2つの存在を作品の最後まで付きまとわせ、結局はユージーンをそこに戻らせているという結末には、都市社会に対する因習的価値観の根強さが示されているとともに、牧歌的理想に対するドライサー自身の必ずしも否定的ではない見解も示されている。しかしその一方で、都市に対立するものとして扱う芸術そのものの中にも、反因習的な新しい精神の出現を描いている。都市化と共に現れた新しい芸術の風潮を強調することで、「都市」による「牧歌」的理想の浸食をとめることは出来ない、という現実も示されており、また、「都市」的価値観が広がる傾向に対しても、否定的ではないドライサーの見解が示されているのである。

そのように本作品をみていくと、世紀転換期における「都市」と「牧歌」の不安定な関係が、本作品においても主人公と女性との関係、或いは芸術との関係の中に示されていることが分かると同時に、ドライサー自身の「都市」と「牧歌」の共存に対する曖昧で中立的な見解もみることが出来る。都市に生きる成功者を主人公とすることで『天才と呼ばれた男』も、『資本家』、『巨人』に引き続き、都市的価値と牧歌的理想が混在する世紀転換期におけるアメリカ社会の現状と、それに対する作者の中立的立場を描いた作品として解釈することが出来るのである。

註

- 1 これまで多くの批評家が『天才と呼ばれた男』を自伝的小説として読んできたこと

は Hussman の指摘からも分かる (91)。

- 2 Riggio 34。
- 3 Walcutt はドライサーの自然主義とは、社会のありのままを描くことで人間の無力さ、人生の無意味さを示すことであると定義している。
- 4 Goldfield 493-523。
- 5 ウィリアムズの『田舎と都市』は、主に 16 世紀以降のイギリス文学に見られる田舎と都市の概念の分析を行ったものであるが、都市と牧歌の対立を描くアメリカ都市小説にもこの分析は当てはめることが出来る。また、ウィリアムズは田舎 (the country) には牧歌 (the pastoral) のイメージがあると指摘している。そのため本論でも、『巨人』『資本家』を扱った拙論と同様「田舎」を「牧歌」と同格の概念として捉えたい。
- 6 これについては筆者が別論、「*The Financier, The Titan* における“都市”と“牧歌”」にて論じている。
- 7 Machor 330。
- 8 ユージーンとアンジェラの結婚に対する否定的な見解はユージーンの周りの人々の反応からも窺える。例えば、ユージーンの芸術家仲間達は結婚の報告を受け、“I’m sorry to hear that.” (126) と言い、同情の意を示しているし、彼にニューヨークの芸術界を教える立場として描かれているミリアム等女性芸術家達はアンジェラの美しさを認めつつも “she was just from the country” と、田舎娘と結婚したことはユージーンにとって “a mistake in his marriage” (137) であると捉えている。また、ユージーンの子供も息子の結婚に対し、“It was all right of course if Eugene wanted to marry a girl from the country, but it robbed the family of a possible glory.” (127) と考えている。牧歌的理想を体現するアンジェラとの結婚が都市生活に適応しないということが示されている。
- 9 スザンヌに立ち去られた直後ユージーンは John Keats (1795-1821) の “The Day Is Gone” の一節を思い浮かべている。自然の美を唄う詩人として知られるキーツの詩をここで持ち出しスザンヌとの日々を花の美しさに例え、それを失うことを嘆いているユージーンの状態には、失われていく牧歌に対する未練を読み取ることができる。
- 10 それが表面化されたのが 1908 年、ニューヨークで開催されたジ・エイト展である。彼ら新聞出身の画家たちは、産業社会の都市に新しく出現した多くの生活情景を題材に取り上げ、都市社会の現実を描いたことから Ash-Can school と呼ばれた (Art Words)。
- 11 ユージーンモデルとなったのは、アッシュ・カン派の一人、Everett Shinn であると一般的には解釈されている。それはドライサー自身も、また、シン自身も認めていることである (Kwiat を参照)。また、ドライサーが挿絵画家たちと以前からの知り合いであったこと、ヘンライについては 1908 年より前から新しいアメリカ美術中心人物として紹介する記事を書いていることからユージーンがアッシュ・カン派を示していることが窺われる。
- 12 作中に出てくるユージーン作品は、シンの作品を思い浮かばせるものが多いと指摘されるが、ドライサーがユージーンを介して示すのは一人の画家の人生ではな

く、19世紀末に劇的に出現した新しい美術全体に対する彼自身の賛同である。例えば、ユージーンがナショナル・アカデミーの展示会に出展する際に持ち込んだ“Six O'clock”という作品は、John Sloanの“Six O'clock, Winter”という作品を意識したものであると考えられるだけでなく彼自身が同様の題材で“Six O'clock”と題した文章を書いており、それは後に*The Color of the Great City*の一章となっている。それによると、ドライサーは、それまでの上品な上流階級の芸術に逆らい、アメリカ社会を忠実に伝えることを最優先した新しい芸術家達による改革に強く賛同していたことが分かる (Kwiat)。

引用文献

- Arnavon, Cyrille. “Teodore Dreiser and Painting.” *American Literature* 17 (1945): 113-26. Print.
- Art Words. 現代美術用語辞典 ver. 2.0. Web. 14 Feb. 2013.
- Dreiser, Theodore. *The “Genius.”* New York: Boni and Liveright, 1928. Print.
- _____. *The Financier*. New York: Signet, 1967. Print.
- _____. *The Titan*. New York: Signet, 1965. Print.
- Goldfield, David, ed. *The American Journey. A History of the United States*. New Jersey: Pearson, 2009. Print.
- Hussman, Lawrence E. Jr. “The ‘Genius’.” *Dreiser and His Fiction: A Twenty-Century Quest*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1983. 91-112. Print.
- Kwiat, Joseph J. “Dreiser’s *The ‘Genius’* and Everett Shinn, The ‘Ash-Can’ Painter.” *PMLA* 67 (1952): 15-31. Print.
- Machor, James L. “Pastoralism and the American Urban Ideal: Hawthorne, Whitman, and the Literary Pattern.” *American Literature* 54 (1982): 329-53. Print.
- Orvell, Miles. “Dreiser, art, and the museum.” *The Cambridge Companion to Theodore Dreiser*. Ed. Leonard Cassuto and Clare Virginia Eby. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 127-41. Print.
- Riggio, Thomas P. “Dreiser and the uses of biography.” *The Cambridge Companion to Theodore Dreiser*. Ed. Leonard Cassuto and Clare Virginia Eby. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 30-46. Print.
- 土屋陽子「*The Financier, The Titan*における「都市」と「牧歌」——クーパーウッドを巡る女性像の変化が示すもの」『多元文化』13 (2013): 21-36. Print.
- Walcutt, Charles Child. *American Literary Naturalism. A Divided Stream*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1956. Print.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: Oxford UP, 1973. Print.